

笹川記念保健協力財団 研究助成

助成番号：2016A-002

(西暦) 2017年 2月 16日

公益財団法人 笹川記念保健協力財団

理事長 喜多悦子 殿

2016年度ホスピス緩和ケアに関する研究助成

研究報告書

標記について、下記の通り研究報告書を添付し提出いたします。

記

研究課題

在宅で最期を迎えたいと希望する独居高齢者とケアマネジャーの思いに関する質的研究

所属機関・職名 名古屋大学大学院医学系研究科国際保健医療学・公衆衛生学教室・講師

氏名 平川 仁尚

I 研究の目的

我が国では、急速な高齢化、核家族化、住み慣れた場所で最期を迎えたいという高齢者本人の希望により、男女とも一人暮らしの高齢者数が急速に増加している。高齢者にとって、一人暮らしは社会からの隔離や孤独感、ひいては早期死亡リスクが高いと報告されている。

これまで、高齢者問題を考える際に、人数の影響から女性の意見や状況が反映されることが多かった。しかし、女性と比べて、男性高齢者は地域活動に参加しないなど孤独になりやすく、健康を害しやすい。

人生観や死生観、すなわちスピリチュアリティは、一人暮らし高齢者のエンド・オブ・ライフにおける健康を考える上で重要な概念であるが、先行研究は少ない。スピリチュアリティがどのように構成されているかは明確ではなく、特に男性においてはほとんど検討されていない

本研究の目的は、一人暮らし男性高齢者のエンド・オブ・ライフにおけるスピリチュアリティを構造化することである。本研究は、当初、性別を問わなかったが、前述のように、研究的意義が高い男性高齢者に焦点を当てた。

II 研究の内容・実施経過

本研究は、一人暮らしの男性高齢者のエンド・オブ・ライフにおけるスピリチュアリティに焦点を当てた質的研究である。ケアマネジャーを対象とするキーインフォーマント・インタビューと一人暮らしの男性高齢者を対象とする戸別訪問によるデプス（深層）・インタビューにより構成された。キーインフォーマント・インタビューとは、核（キー）となる情報提供者（インフォーマント）に対する聞き取りである。デプス・インタビューは、構造化面接とは異なり、相手が意識していない、あるいは無意識に行っている領域にまで踏み込み、より深く掘り下げて情報を得ようとする聞き取りである。

データ収集

キーインフォーマント・インタビューKey informant interview (KII)

本研究では、ケアマネジャーをキーインフォーマントとした。ケアマネジャーは、利用者の評価、ケア計画立案、モニタリングにおいて中心的な役割を担っており、一人暮らしの高齢男性の生活の質の向上に大きく関わっている。

対象者について、秋田、仙台、横浜、名古屋、徳島、朝倉（福岡県）のケアマネジャーを有意抽出した。対象のケアマネジャーは研究代表者と既知の関係で、それぞれが別々の職場に勤務していた(表 1)。

KIIs のデータは、2016 年の 4 月から 7 月にかけて、フォーカスグループ・ディスカッションにより収集された。KIIs の参加者には、一人暮らしの男性高齢者の日常生活に関する意識や人生観・死生観に関する開かれた質問を行った。人生観・死生観に関する質問について、米国で広く知られている 5 つの願い five wishes の項目を参考にした。KIIs は、老年内科医で、質的研究の経験がある研究代表者の司会の下、各県の会議室か、Web 会議システム上で行われた。KIIs の時間は 1 回約 60 分で、その内容を録音とメモにより記録した。

デプス・インタビューIn-depth interview (IDIs)

調査対象地は、ソーシャル・キャピタル指数が低位な愛知県、兵庫県、福岡県、中位な三重県、徳島県、高位な秋田県、岐阜県の都市郊外とした。ソーシャル・キャピタルは、家族、友人、地域の人々によって構成される社会的ネットワークの産物である直接的もしくは間接的な資源であり、社会・地域における人々の信頼関係や結びつきを表す概念である。今回、対象地を郊外にしたのは、ソーシャル・キャピタルの強さが県の平均であると仮想したからである。

対象者は、認知症がないか、あっても本研究のテーマについて意見の表出が可

能で、生活支援か介護を必要としていて、研究参加の同意が得られた一人暮らしの男性高齢者であった。上記の県の KIIs 参加者か研究代表者の知り合いのケアマネジャーに、対象者の特徴や一人暮らしになったいきさつに出来るだけ多様性を持たせるように対象者のリクルートを依頼した。対象者の担当のケアマネジャーから本研究の目的や対象者の選択基準、守秘義務等について説明を行い、同意を得た。最終的に、77 歳から 96 歳までの 15 人から同意を得た (表 2)。2016 年 7 月から 11 月にかけて、一人ひとりを個別訪問し、KIIs と同じ要領で 1 回約 60 分の深層面接を行った。IDIs に先立ち、KIIs の内容に基づいて研究者と助手 2 名により議論を行い、IDI 用ガイドを作成した。研究代表者と助手 2 名によりインタビューを進め、内容は録音とメモにより記録した。

データ分析

研究代表者と助手 2 名が、主題分析により KIIs と IDIs のデータを構造化した。まず、転写原稿とフィールドメモの全体に目を通しながら、1 つの概念あるいは見解を含む意味単位を抽出した。次に、各意味単位を意味の近似性に基づいてグループ化を行い、サブカテゴリー、カテゴリー、テーマへと概念化・抽象化した。

信頼性の確保のために、意味単位、構造化の結果の全てについて、KIIs 参加者全員が確認した。分析中は、研究者と研究協力者 2 名、助手 2 名で解釈の相違がないか、コンセンサスが得られるまで議論した。

尚、本研究は名古屋大学医学部倫理委員会の承認を受けて実施された (承認番号 2015-0444)。

表 1. 対象者の属性

	場所	年齢 (歳)	性別	経験年数 (年)
1.	秋田	56	男	31

2.	秋田	44	男	20
3.	秋田	41	女	10
4.	秋田	41	女	9
5.	秋田	37	女	1
6.	秋田	29	女	11
7.	秋田	28	女	10
8.	仙台	42	男	15
9.	仙台	36	男	15
10.	仙台	35	女	12
11.	仙台	33	男	8
12.	横浜	62	女	10
13.	横浜	55	女	20
14.	横浜	52	女	10
15.	横浜	49	女	18
16.	名古屋	50	女	15
17.	名古屋	49	女	16
18.	名古屋	45	女	8
19.	名古屋	43	女	15
20.	名古屋	42	女	19
21.	名古屋	40	男	14
22.	名古屋	40	男	10
23.	名古屋	37	女	5
24.	徳島	50	女	27
25.	徳島	39	女	0.5
26.	徳島	31	女	6
27.	徳島	27	女	3
28.	朝倉	45	女	12
29.	朝倉	36	女	7
30.	朝倉	32	女	7

Ⅲ研究の成果

1. 一人暮らしの男性高齢者のエンド・オブ・ライフにおけるスピリチュアリティ：ケアマネジャーの視点から

KIIs の内容から 231 の意味単位が抽出された。それらを 11 カテゴリー、現状、

促進要因、阻害要因の3テーマに分類した(図1)。以下、抽象度の高い順にテーマを【 】、カテゴリーを《 》、意味単位を「 」で示し、記述する。

【現状】

《孤立無援》

一人暮らしの男性高齢者は、家族、親戚、友人、知人のいずれとも疎遠になりがちか、疎遠であることが多い。そのため、認知症など支援が必要な状況になっても、なかなか周囲から気付かれにくく、支援が届かなくなりがちである。

「地域の集会やデイサービス、人が集まる所に行きたがらない」(対象者 19)

「以前からの関係にもよるが、家族から見捨てられている気がする」(対象者 30)

《自律不能への不安》

一人暮らしの男性高齢者は、高齢者介護施設入所や終末期ケアを含めて、医療・介護サービスを自分で選択できなくなることへの不安を強く持っている。家族の意向で施設入所となった事例を経験しているケアマネジャーもいた。また、ケアマネジャーとしても、どのように高齢者本人の自己決定を支援するか、日々悩んでいるようだ。

「一人暮らしの男性高齢者は遺言状の書きかけをかなりこまめに行っている」(対象者 20)

「一人暮らし身寄りなしは、入院や施設利用ができない場合もあり緊急時の対応に困っている」(対象者 4)

《乏しい彩り》

ケアマネジャーは、一人暮らしの男性高齢者の生活は不規則で、彩りのないもの

と考えていた。コンビニエンスストアで調理済みの食品を買ってきたりしている事例を経験していた。また、時間が不規則で朝起きるのが遅い高齢者も担当した経験を持っていた。

「一人暮らしでも、コンビニがあるので食事に困っている様子はないようだ」
(対象者 15)

「少しでも季節の行事を感じられる介護や会話をしてあげたい」(対象者 7)
(対象者 17)

《意外な脆さ》

「一人暮らしの男性は普段横柄な態度の人でも病気になると想像以上に弱くなる気がする」(対象者 17)と考えるケアマネジャーがいた。

《家族的愛情の渴望》

一人暮らしの男性高齢者の中には、家族でない他者に家族的愛情を求めてすがりついているように見える高齢者がいる。その他者には、医師、介護士をはじめ、時には猫など動物までも含まれる。また、大勢の人との希薄な関わりより、一人ひとりとの1対1の濃厚な関係を好む傾向がある。

「猫が親族のような人も多い」(対象者 13)

「独居男性高齢者は彼女のような身の回りの事をしてくれる女性がいる」
(対象者 20)

「独居男性高齢者は自分のために融通をきかせてくれる職員を好む」(対象者 19)

【促進要因】

《支援のビジョン》

これまで一人暮らしの男性高齢者に関する情報が十分でなく、支援の仕方に関するノウハウの蓄積が十分でない。支援者の経験に頼りきりであったといえる。そのため、支援者は責任を持って関わることに躊躇してしまいがちである。

「病院関係者は大病を患った一人暮らしの男性高齢者が退院して自宅で暮らすイメージがつかない」(対象者 21)

「近隣の人には行政や福祉関係者に何とかしてほしいと思っている」(対象者 22)

《過去の栄光》

一人暮らしの男性高齢者は、支援者が来ると過去の自慢話をよくされる。それを聞くことが支援につながるとケアマネジャーは考えていた。実際に、積極的に傾聴することで、元気になった事例も経験していた。

「前向きでない事が多く、イキイキとしていた時代の話聞くなどして前向きになるような支援をしたい」(対象者 9)

「自分の良かった時の話を聞いてあげることでアプローチできる」(対象者 24)

【阻害要因】

《支援の拒絶》

支援者は、一人暮らしの男性高齢者には周囲からの支援を拒絶する人が多いと感じていた。その背景には、自暴自棄、弱って行く姿を人に見せたくない、人の世話にはなりたくないといった感情がある。

「一人暮らしの男性高齢者は終末期に弱っている姿を娘さんには見せないようにする人もいる」(対象者 20)

「入院し初めてサービスを受けられるようになる人もいる」(対象者 2)

《生活の中の固執》

傍目には不潔、不健康な生活を送っているようにみえても、介入を頑なに拒む一人暮らしの男性高齢者の事例を経験したケアマネジャーがいた。それは、一種のこだわりのようなものにも思っていた。

「一人暮らしの男性高齢者は一刻で助言を聞き入れてくれないことが多く困っている」(対象者 21)

「昔から市販薬への拘りがあり自分の思うように服用しているため、多量に服用したり、飲みあわせの面から体に影響が出ているようで困っている」(対象者 10)

《セキュリティの壁》

一人暮らしの男性高齢者にとってセキュリティ対策がなされたマンションは防犯上安心であるが、支援者にとっては訪問や介入がしづらい場合がある。民生委員など近隣住民からの目が届きにくく、支援が必要な状況にあっても気づかれにくい。つまり、セキュリティ対策がかえって地域からの働きかけを困難にしている。

《暗い過去》

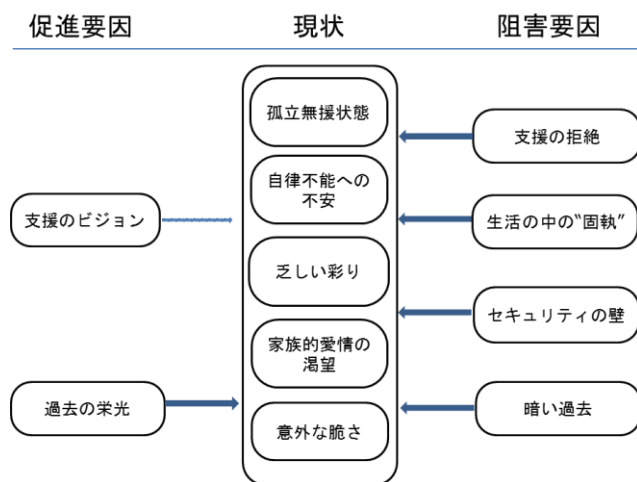
一人暮らしの男性高齢者の中には、過去のことを話したくない人もいる。その人を深く知るために踏み込んでインタビューをしようとしても、本音を語ろうとはしない。そうした場合、支援は表面的にならざるを得ない。

「一人暮らしの男性高齢者はあまり本音を言わないので表面的なやり取りになってしまう」(対象者 27)

「一人暮らしの男性高齢者は後ろめたいことがあると逆ギレする」(対象者

19)

図1. ケアマネジャーから見た一人暮らしの男性高齢者のエンド・オブ・ライフにおけるスピリチュアリティとそれを取り巻く状況



図解

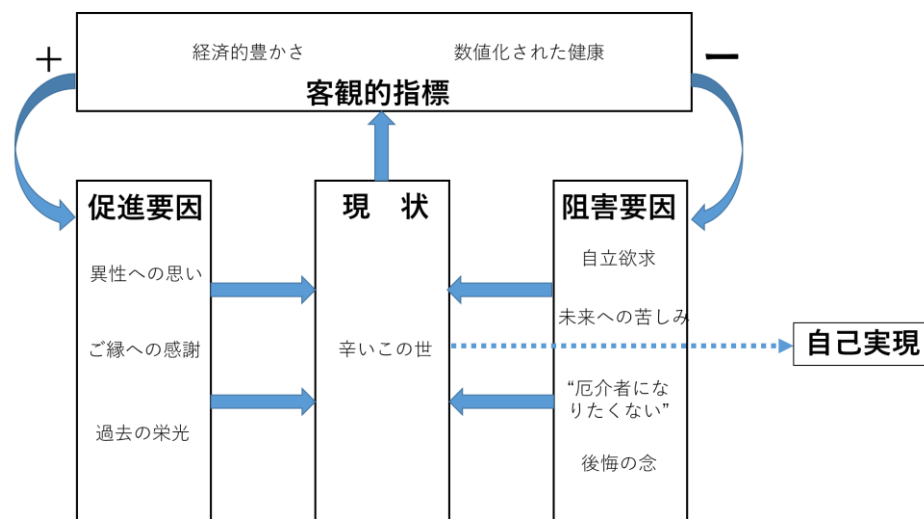
一人暮らしの男性高齢者は、辛い現実と儚い希望との間に生きている。辛い現実とは、孤立無援、自分のことを自分で決められなくなるのではという不安を抱えている、生活に彩りが無い状態である。また、過去の経験がスピリチュアリティに強い影響を与えている。高齢者の中には、今よりも若く、輝いていた頃の思い出、つまり過去の栄光にすぎる一方、暗い過去や後悔が頭から離れない状態にある人がいる。こうした辛く儚い現実の疲れを癒してくれる存在を求めている。我々はこれを家族的愛情への渇きと命名した。一人暮らしの男性高齢者は生活全般に亘り支援が必要な状態にあるが、マンションの防犯セキュリティ、自身のライフスタイルへの固執からくる支援の拒絶もあり、支援者はどのように一人暮らしの男性高齢者を支援して行ったらよいのか日々悩んでいる。

2. 一人暮らしの男性高齢者のエンド・オブ・ライフにおけるスピリチュアリティ：デプス・インタビューから

表 2. 対象者の属性

	場所	年齢(歳)	独居期間(年)	婚姻状態	寝たきり度
A	秋田	83	1>	別居	J
B	秋田	78	10	死別	B
C	愛知	96	1>	死別	J
D	愛知	82	4	死別	J
E	愛知	89	7	死別	B
F	岐阜	93	-	未婚	B
G	岐阜	92	7	死別	A
H	三重	80	7	死別	J
I	三重	95	15	死別	A
J	兵庫	84	-	未婚	C
K	兵庫	82	1	死別	B
L	徳島	77	9	死別	J
M	徳島	86	4	死別	J
N	福岡	83	4	死別	J
O	福岡	82	2	死別	J

図 2. 一人暮らしの男性高齢者のエンド・オブ・ライフにおけるスピリチュアリティ



IDIs の内容から 201 の意味単位が抽出された。それらを 11 のカテゴリー、5 のテーマに分類した (図 2)。

【自己実現】

一人暮らしであることと自由な時間が多いことにより、家事にこだわりを持って取り組むことや、趣味に打ち込むことのできる時間が増える。これにより現在の生活が最も幸せであると感じている一人暮らし高齢男性は多い。

「家に自分で花を飾ったり、きれいにしている」(対象者 M)

「新しい料理にチャレンジしてみたい」(対象者 N)

【辛いこの世】

目と耳や体の不自由などの身体的原因、また人間関係の希薄化とそれに対するインセンティブの減少などにより日々の生活が無気力なものになっていく。その結果、絶望や自暴自棄といった感情を抱いて日々を送ることになる。

「先のことは考えることはしていない、ボーっとしているだけ」(対象者 F)

「先が短いからたばこくらい吸わせてくれ」(対象者 K)

【客観的指標】

《経済的豊かさ》

金銭的豊かさは、高齢者であっても追い求めるものであろう。無駄・不要な出費を抑え、極力質素儉約に努めたいという思いを強く抱いている人がいた。また、年金が多いので幸せと述べた高齢者もいた。

「お金の節約のため、自炊せざるを得ない」(対象者 N)

「お金に余裕がないので、仕事を辞めるに辞められない」(対象者 H)

《数値化された健康》

自分が健康だと感じる、いわゆる主観的健康感はその本当の健康に影響を与えることは良く知られている。しかし、ここでいう客観的健康とは、例えば平均寿命との比較で自分が“より”健康であるかである。また、検査データなど客観データ

を根拠に自分の健康を確認することも含まれる。

「採血のために大丈夫って言われるので、体の不安はない」(対象者 J)

「平均寿命より長生きしているから嬉しい」(対象者 D)

【促進要因】

《異性への思い》

亡くなった妻への思いを口にする人や、身近に思いを寄せる女性がいる人もいる。いずれも、男性高齢者の心の拠り所、生きていく上での支えとなっている。

「妻のお骨を今でも部屋に置いたままにしている」(対象者 K)

「月に二回大好きな女性と会えるのが生きがいで、オシャレをする理由もそれ」(対象者 D)

《ご縁への感謝》

先祖や他者への感謝の念を抱きながら、人々との結びつき、つながりを感じ、心穏やかに暮らしている人がいた。こうした大切な人との絆が生きていく上での支えとなっていた。

「みんなに好かれて良い人に囲まれているのも、両親のおかげだと思う」(対象者 G)

「都心に来て、いい病院で妻の認知症を早期発見してもらえて良かった」(対象者 A)

《過去の栄光》

加齢とともにこれまでできなかったことができなくなっていく歯がゆさを感じることが多い。その一方で、自分が輝いていた時代を懐かしむことは、自尊心を高め、生きてきた意味を再確認できる機会となる。

「昔のようにスポーツがしたい」(対象者 E)

「将棋が好きで、大会にも出ていい成績を収めていた」(対象者 J)

【阻害要因】

《自立欲求》

元気で長生きし、苦しまずに逝く、いわゆるピンピンコロリを望んでいる高齢者は多い。そのために、寝たきりにならないよう介護予防に努めている人もいた。

しかし、見方を変えると、健康への執着ともとれ、スピリチュアルペインの原因ともなり得る。

「風呂、便所、ベッドで倒れてそのまま逝くのだと勝手に思っている」(対象者 I)

「死は怖いけど、早く死にたい」(対象者 C)

《未来への苦しみ》

将来への不安は、一人暮らしの男性高齢者に限らず、誰もが感じるものであろう。ただ、他者との関係性が希薄になりがちな一人暮らしの男性高齢者の場合はさらにその不安は強い。自分ではどうすることも出来ないという自己制御不能感、近い将来必ず訪れる死への不安、そして自分の死後に残される者への心配がある。

「この先は死しかないから、深刻に考えないようにしている」(対象者 I)

「一人暮らしなので、誰が世話をしてくれるのかと不安だ」(対象者 H)

《“厄介者になりたくない”》

一人暮らしの男性高齢者は、厄介者にはなりたくない、できるだけ他人に迷惑をかけずに生きていたいという思いを抱いている。家族に対しても、例え終末期ケ

アや自分の死後について話し合うことでさえ遠慮をしてしまう。

「子供には子供の生活があるので、いざとなったら街に頼んで施設に入れてもらうしかない」(対象者 L)

「何かあっても夜に電話するのはやっぱり気が引ける」(対象者 K)

《後悔の念》

現在の体の不自由さは過去の自分の不摂生の結果であると考えている人がいる。

また、現在の家族や周囲との関係についても、悪化の原因は自分にあり、自業自得だと考えている人がいる。

「子供たちとの関係もこうしておけばよかったと後悔することが多い」(対象者 K)

「350万を貸してしまったが、人がいいのは最悪だと思う」(対象者 M)

図解

一人暮らしの男性高齢者のスピリチュアリティは、「異性への思い」、「ご縁への感謝」、「過去の栄光」によって促進され、「自立欲求」、「未来への苦しみ」、「厄介者になりたくない」、「後悔の念」によって阻害されていた。また、「数値化された健康」や「経済的豊かさ」といった客観的な指標の結果が、日常生活の満足度に影響を与えていた。

IV今後の課題

我々の検索し得た範囲では、本研究は我が国の一人暮らしの男性高齢者本人にスピリチュアリティに関する深層面接を行った初めての研究である。一人暮らし高齢男性のスピリチュアリティは、孤独感や死への恐怖だけでなく、日常の充実感を支える複数の要因によって構成されていることがわかった。ノルウェー

における Bergland らによる同様の研究では、「孤独」、「共同生活の喪失と希求」、「活動性の維持」、「自由」という 4 つの要素が明らかにされている。また、我が国における河野らの研究では、「自律心」、「健康上の不安」、「日常生活の維持」という要素がセルフケア確立のための課題として明らかにされている。今回、スピリチュアリティの構成要素として「異性への思い」、「過去の栄光」、「数値化された健康」、「後悔の念」などユニークな概念が抽出された。今回、ケアマネジャーが一人暮らしの男性高齢者の支援の仕方で日々悩んでいることも明らかとなったが、本研究の成果が、一人暮らしの男性高齢者の支援に関する医療・介護従事者のための指針の策定に資するものと期待する。

今後の課題としては、今回の対象としなかった一人暮らしの女性高齢者のスピリチュアリティの研究も必要であろう。この分野の研究も依然十分に行われているとはいえない。また、本研究の結果の信頼性を高めるために、全国アンケート調査など追加の量的研究が必要である。今回、ケアマネジャーが一人暮らしの男性高齢者の支援方法に悩んでいることが示唆された。利用者一人ひとりのスピリチュアリティを理解し、それに基づいたその人らしさを尊重した支援計画を立案できるように、本研究の結果を活かしたインテーク技法のトレーニングプログラムの開発も今後の課題と考える。

V 研究の成果等の公表予定（学会、雑誌）

日本国際保健医療学会第 35 回西日本地方会（2017 年 3 月 4 日（土）：神戸大学六甲台キャンパス）で発表予定。また、海外の学術誌に投稿を予定している。